

被災地支援プロジェクトが子どもの向社会性に及ぼす影響

北村 英雄(生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 黒澤 毅

キーワード:被災地支援プロジェクト、向社会性、共感、社会的望ましさ

1. 緒言

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震について、文部科学省²⁾は心のケアの必要性を「近年、災害や事件・事故が発生しており、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えている」と発表している。現在では被災している子どもたちの問題として、学校教育の遅れ、放射能汚染の可能性による外出禁止が挙げられている。また、避難先の新しい土地での学校生活における「いじめ」や「環境変化」による不登校の例は少なくない。このことが原因で子どもの「思いやり」が育たなくなることがある。一方、飯田¹⁾は「野外教育は、多くの発見をしながら豊かな心を育ててゆく」と述べている。また、成内³⁾は「児童の社会性の発達にとって、最も重要な課題の1つに、他者の感情や意図を適切に理解し、共感性に基づく向社会的な行動がとれることをあげることが出来る」と述べている。

そこで本研究では、被災地支援プロジェクトに参加した子どもの向社会性の変化を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】2011年7月26日～8月23日に実施された「2011夏休み青少年支援プロジェクト」に参加した福島県の小学4～6年生を対象とした計51名を対象とした。尚、支援プロジェクトの主なプログラム内容は、沖縄県の地域住民が招待した地域交流、カヤックなどの自然体験、沖縄見学、キャンプ体験、子どもたち全員で準備して作り上げた手作り運動会、夏休みの宿題や受験勉強などの勉強会、日々の運動などの内容で構成された。

【調査用紙】

本研究における向社会性は、桜井⁴⁾⁵⁾が用いた共感、社会的望ましさのことを指し、「児童用共感測定尺度」の1因子20項目および「社会的望ましさ尺度」の1因子25項目を用いて調査を実施した。また、キャンプ活動での共感、社会的望ましさの具体的な言動をみるために「ふりかえりシート」を筆者が独自に作成して用いた(表1)。

表1 調査時期

	pre (5項目)	camp1 (14・22項目)	camp2 (17・25項目)	post (28項目)
共感	○	○	○	○
社会的望ましさ	○	○	○	○
ふりかえりシート	—	○	○	—

3. 結果と考察

1) 学年別にみた共感得点について4回の調査時期を要因とした2要因の分散分析の結果、学年と調査時期に向上がみられた。しかし、交互作用はみられなかった(表2)。また、多重比較を行った結果、4年生の共感がcamp1-post間で向上した。

表2 各学年(小学4・5・6年生)における共感得点の平均値・標準偏差・分散分析結果
(各学年の得点と調査時期を要因とする3×4の2要因分散分析)

各学年	N	pre	camp1	camp2	post	調査時期	学年	交互作用
4年生	21	71.85(2.17)	74.57(1.84)	77.33(2.05)	77.95(2.29)			
5年生	13	78.46(2.76)	84.07(2.34)	81.30(2.60)	83.31(2.91)	4.97*	5.85**	0.71
6年生	17	81.88(2.41)	82.58(2.04)	84.17(2.27)	85.64(2.55)			

**p<.01 *p<.05

小学4年生のキャンプ活動は中学生、高校生とキャンプ生活を共にしたことが影響していると考えられる。

2) 性別にみた共感得点について4回の調査時期を要因とした2要因の分散分析の結果、性別と調査時期に向上がみられた。しかし、交互作用はみられなかった(表3)。また、多重比較を行った結果、女子の共感がcamp1-post間で向上したことがみられた。

表3 性別(男子・女子)における共感得点の平均値・標準偏差・分散分析結果
(性別の得点と調査時期を要因とする2×4の2要因分散分析)

性別	N	pre	camp1	camp2	post	調査時期	性別	交互作用
男子	27	73.70(11.02)	77.22(10.45)	77.62(10.36)	78.33(11.88)			
女子	24	80.45(9.37)	82.41(7.18)	84.00(7.75)	86.04(8.04)	5.42*	8.71**	0.31

**p<.01 *p<.05

向上した要因として、女子のキャンプ活動中の取り組みには内発的な行動が感じられ、自ら率先して活動していたことが挙げられる。

一方、男子は外発的行動が多く、スタッフの指示で行動したことが多かったため、共感に影響していたと考えられる。

3) 性別にみた社会的望ましさについて4回の調査時期を要因とした2要因の分散分析の結果、調査時期に向上がみられた。しかし、交互作用はみられなかった(表4)。また、多重比較を行った結果、男子の社会的望ましさがcamp2-post間で向上したことが明らかとなった。

表4 性別(男子・女子)における社会的望ましさ得点の平均値・標準偏差・分散分析結果
(性別の得点と調査時期を要因とする2×4の2要因分散分析)

性別	N	pre	camp1	camp2	post	調査時期	性別	交互作用
男子	27	15.59(4.46)	14.77(4.95)	14.62(5.63)	16.03(4.83)			
女子	24	16.95(4.39)	16.75(4.60)	17.50(4.39)	18.08(4.42)	4.03**	2.76	1.26

**p<.01

向上した要因として、支援プロジェクト期間中に沖縄県のサッカーチームとの親善試合が行われたことや、支援プロジェクトの成り立ちとなった、義援金を募って下さった方々に感謝の手紙を送り、様々なお礼の言葉を述べた体験が影響していたと考えられる。

4. まとめ

共感得点、社会的望ましさ得点は支援プロジェクトの参加において向上することが明らかとなった。特に小学4年生や女子に関して、得点が向上することが明らかとなり、小学4年生はキャンプ終了から12日間、小学5・6年生はキャンプ終了から4日間の集団宿泊生活を行った。キャンプ終了から、キャンプ活動で学んだことが集団宿泊生活で活かされたことや仲間と協力すること、楽しむことで共感、社会的望ましさについて考える時間、自分と向き合う時間など、小学4年生の方が多くあったために向上したと考えられる。

引用・参考文献

- 飯田 稔(1992): 森林を生かした野外教育, 林業改良普及双書 111: p28, p133.
- 文部科学省(2010): 子どもの心のケアのために: p1-9. <http://www.mext.go.jp/fa/menu/1297484.htm>
- 成内 有奈(2009): 協同学習が児童期の子どもの向社会的行動に及ぼす効果の研究, 帝塚山大学心のケアセンター紀要 5: p46-47.
- 桜井 茂雄(1984): 児童用社会的望ましさ測定尺度(SDSC)の作成, 教育心理学研究第32巻第4号: p64-68.
- 桜井 茂雄(1986): 児童における共感と向社会的行動の関係, 教育心理学研究第34巻第4号: p54-58.